

# 英雄モモンの数奇な人生（仮）

Dr. Eddy

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、正義に憧れた英雄の物語

---

と言う名のモモンとキーノ（イビルアイ）のイチャラブ物語  
初投稿につき拙い文章力  
作者多忙・鈍筆につき気長に待ってね

# 目次

序章く英雄の始まりく

1



# 序章く英雄の始まりく

荒い息で少年は呼吸を繰り返す。

周囲の草木が揺れるたびにびくりと身を震わせ、少年は小動物のような動作で周囲を見回す。

辺りは森であり、ただでさえ鬱蒼と茂るその場は夕暮れという事もあり地上に光は殆ど届かず、辺りは闇に包まれていた。

追手の足音は段々と近づいてくる。

少年は途方に暮れ、老木の洞に潜り込み両膝を抱え込みすすり泣く。

「どっつして、いんな…」

そんな言葉が彼の口から力なく零れ落ちた。

彼の名前はモモン。

大陸の東に位置するとある国のとある教会に住み込みで務める神官見習いである。

幼少期より足繁く神殿に立ち寄り神に祈りを捧げる信心深い少年であり、いつからか彼は神官を目指し熱心に勉強を始める。

神殿の神官はモモンの信心深さを気に入る、彼に洗礼を受けさせ神官見習いとなる事

を許した。

ある日、モモンは修行の一環として神官によって巡礼のキャラバンに参加する事になった。

しかし巡礼の最中に小鬼と人食い大鬼の集団にキャラバンが襲撃されてしまったのだ。

当然モンスターや盗賊を警戒して戦士や野伏が哨戒や護衛にあたっていたのだが、襲撃の想像以上の規模に倒れ、キャラバンは四散することとなった。

すばしっこい小鬼が執拗に追いかけて来たが一緒に逃げていた神官が第2位階の信仰系魔法まで扱い、多少なりとも近接戦も行えるクレリックだったからこそ少しばかりは生き延びる事ができた。

しかしそんな神官もやがては魔力も体力も底をつきてしまう。

「モモン君は逃げなさい 貴方はいずれ皆を救う事が出来る ここで死んではいけない」

モモンは治癒魔法の効果増大というタレントの持ち主であり、神官はそんなモモンの将来を見込んで彼を逃がす事を決めたのだった。

鎧矛を手に追手の小鬼に立ち向かう神官を尻目に、森を駆け抜けるモモン。

野伏でもない彼が追手と距離を離す事ができたのは、神官が時間を稼いでくれたのと最

期に魔力を振り絞り掛けてくれたくクイック・マーチ早足早足の効果のお陰だった。

そして昼過ぎから逃げ続け、今に至る。

人食オい大鬼ガの重鈍な足音と、木々を薙ぎ倒す音が近づいてくる。  
クイック・マーチ＜早足＞の効果は既に切れ、体力も尽きている。

魔法も第1位階はライト・ヒーリング軽傷治療ゴブリンしか使えず、第0位階では役に立たない。

小鬼の素早い足音が近づいてくる。

みんなの犠牲を無駄にはしないと必死に逃げ続けてきたが、最早諦めるしかなくなかつた。

人食オい大鬼ガが振るう棍棒の一撃によつて轟音と共に隠れていた老木がへし折られ、衝撃で洞から投げ出されるモモン。

起き上がると周囲をゴブリン小鬼と人食オい大鬼ガによつて完全に囲まれていた。

聖印を手にガタガタと震える少年に、ゴブリン小鬼達は歪んだ笑みのような表情を浮かべながら既に血塗れた短剣を携えてゆつくりと距離を詰める。

——神よ　どうか助けてください　お願いします

恐怖の余り声に出せないが、心の中で繰り返し続ける。

振り下ろされる短剣。赤熱感を背中に感じ、遅れてやってきた激痛に苦悶の声を漏らした。

小鬼達の笑い声が激痛に混乱する頭に響く。疲労と激痛によつて限界を迎えていたモモンは地面に倒れ込む。

再び振り下ろさんと高く掲げられる短剣を前に、彼は力なく呟く。

「助けて」

しかし小鬼達が聞き届けるはずも無く、無情に短剣が振り下ろされる。

直後、真紅が視界を埋め尽くした。

「そこまでだ。」

眼前で炸裂する爆発の如き凄まじい金属音が日没の森に響き渡る。一体何が起こったのか分からないモモンの眼前で、真紅がはためた。

その時の光景を彼は一生——否、死しても忘れはしないだろう。

あらゆる不浄を跳ね除け、遍く絶望を切り裂く純白の輝きが月に照らされ、どんな星



よりも眩く輝いていた。

兜の奥の眼光は目の前の小鬼達を鋭く射抜き、あちらはピクリとも動かなかつた。その余りの神々しさはどんな言葉よりも雄弁にモモンに語り掛けていた。

——君はもう大丈夫だと。

そしてそれは幻想ではなく、爆音と共に短剣もろとも両断された小鬼を皮切りに次々に切り裂いていく。たとえ人食い大鬼が棍棒を振り回そうと、鎧袖一触に両断する。

一切の敗北の余地の無い様はまさしく吟遊詩人が語る英雄の姿そのものだった。

やがて辺りが片付くと、純白の騎士はモモンに治癒魔法をかけた。痛みが消え意識がハッキリと澄み渡ったモモンは騎士に尋ねる。

「何故見も知らない私を……」

騎士はモモンが言い終える前に返答する

——誰かが困っていたら助けるのは当たり前。

こうして少年は決心した。あらゆる絶望を打ち砕き、弱者を救う正義の味方になると。

英雄になると。

——これはやがて英雄譚に語られる大英雄になる一人の男の、始まりの物語り。